

北アルプス 奥穂高岳南陵 山行報告〔途中撤退〕

日 時：2021 年(令和 3 年)5 月 1 日～4 日

参加者：中原・中野・中山・岡村

行 程：岳沢小屋[4:45] ⇒ 南陵取付き[6:05] ⇒ トリコニーの下部付近[9:30] 撤退 ⇒
南陵取付き[11:00] ⇒ 岳沢小屋[11:40]

1 日 平湯温泉キャンプ場のバンガローに宿泊。終日雨模様で、山は積雪が予想された。

2 日 上高地は、通年マイカー規制のため、あかんだな駐車場よりシャトルバスで上高地へ。
みぞれ模様の中、明日の天候の回復を期待して岳沢に向かった。

夏の離れたテン場は、雪崩の危険があるとかで岳沢小屋のすぐ横にテン場が設置されていて 10 時 30 分頃には、到着。



上高地から岳沢へ



岳沢小屋



岳沢テン場

3日 3時起床。連休に入り天候が冬型となり不安定な天候の中、夜が明けるとトリコニーが確認できる状況であったため、南陵を目指した。



正面上部トリコニー

取り付きからの1ピッチ目は、藪コギで、その後膝までのラッセルを強いられながら右にトラバース気味に進んだ後、雪壁を登攀。



1ピッチ目の藪コギ



ラッセルをしながらの登攀



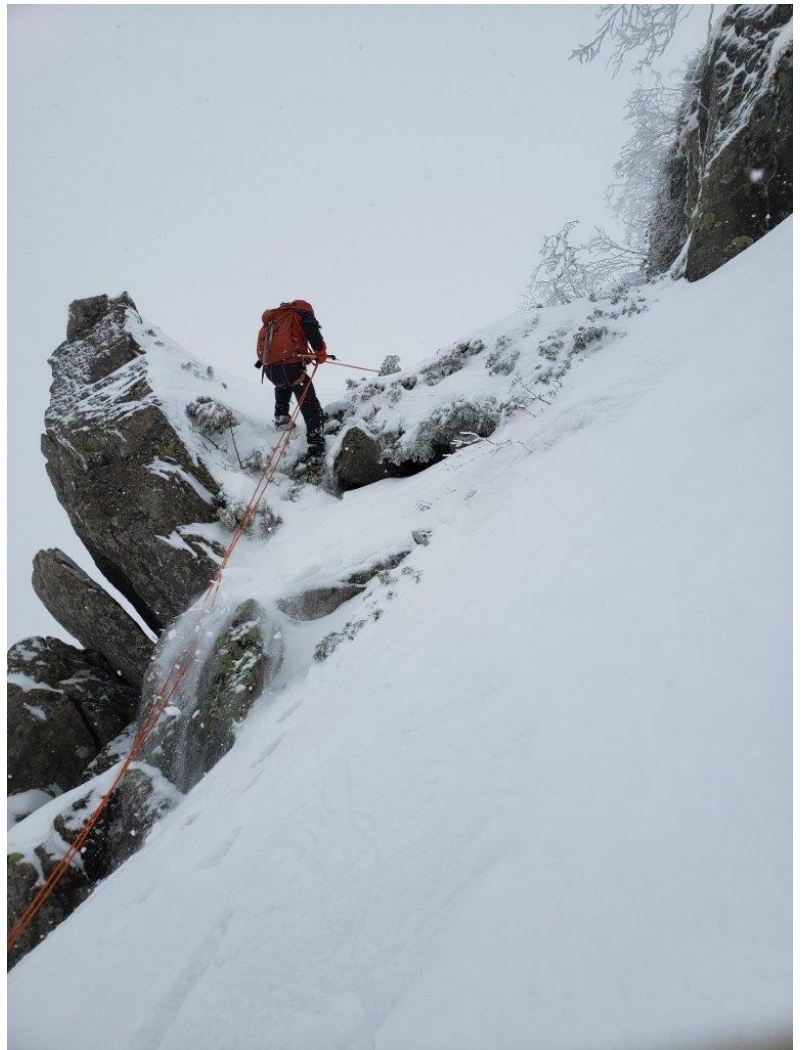
撤退時に確認できたが、積雪が多かったためルートを誤りここまで登ってしまったが、この少し下を右トラバースする必要があった。

トリコニー手前の下部岸壁末端を右にトラバースし、回り込む時点で登りすぎてしまったため
確りとした木の根にシュリングを捨て縄として残置、支点とし数メートル懸垂下降。

下部岸壁を回り込んだ後、雪壁を詰めるも、トリコニーの下あたりでまったく見通しもきかない。

気温も下がってきて、このまま進んでもラッセルを伴う登攀では、仮に南陵を抜けても行程的に厳しいと判断し、早々に撤退することとした。

懸垂下降

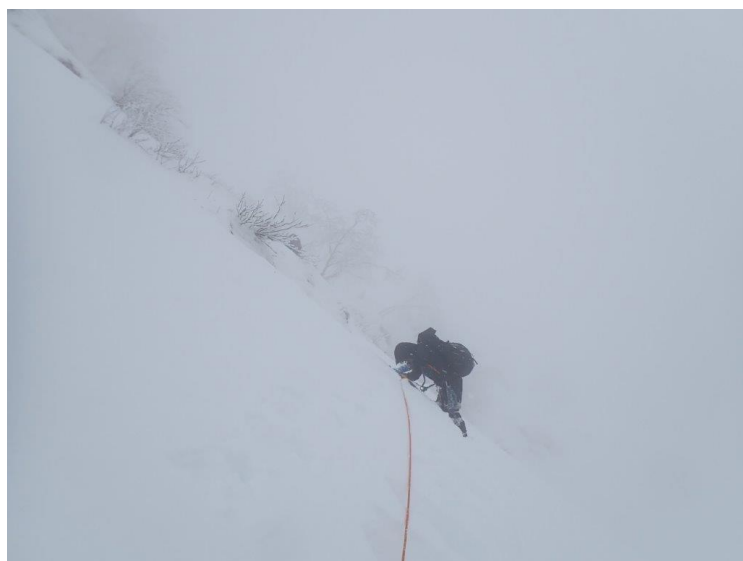


この先までで
撤退

撤退途中の積雪の中、ライチョウが目の前の木に停まり、たくましく生きている様子を間近に見ることができ、一瞬心が和んだ。



ライチョウ



斜面をトラバースしての撤退



1ピッチ目の抜け口まで下降



1ピッチ目取り付きより撮影

岳沢小屋を出発し約 7 時間の行程であった。

岳沢のテン場代が、1 泊 1 名 ¥2,000 と値上がりしていたこともあり、南陵から下山後、昼には早々にテントを撤収して上高地へ下山。



岳沢小屋にて



下山途中で出会った、毛づくろいをするサル



吹雪の河童橋

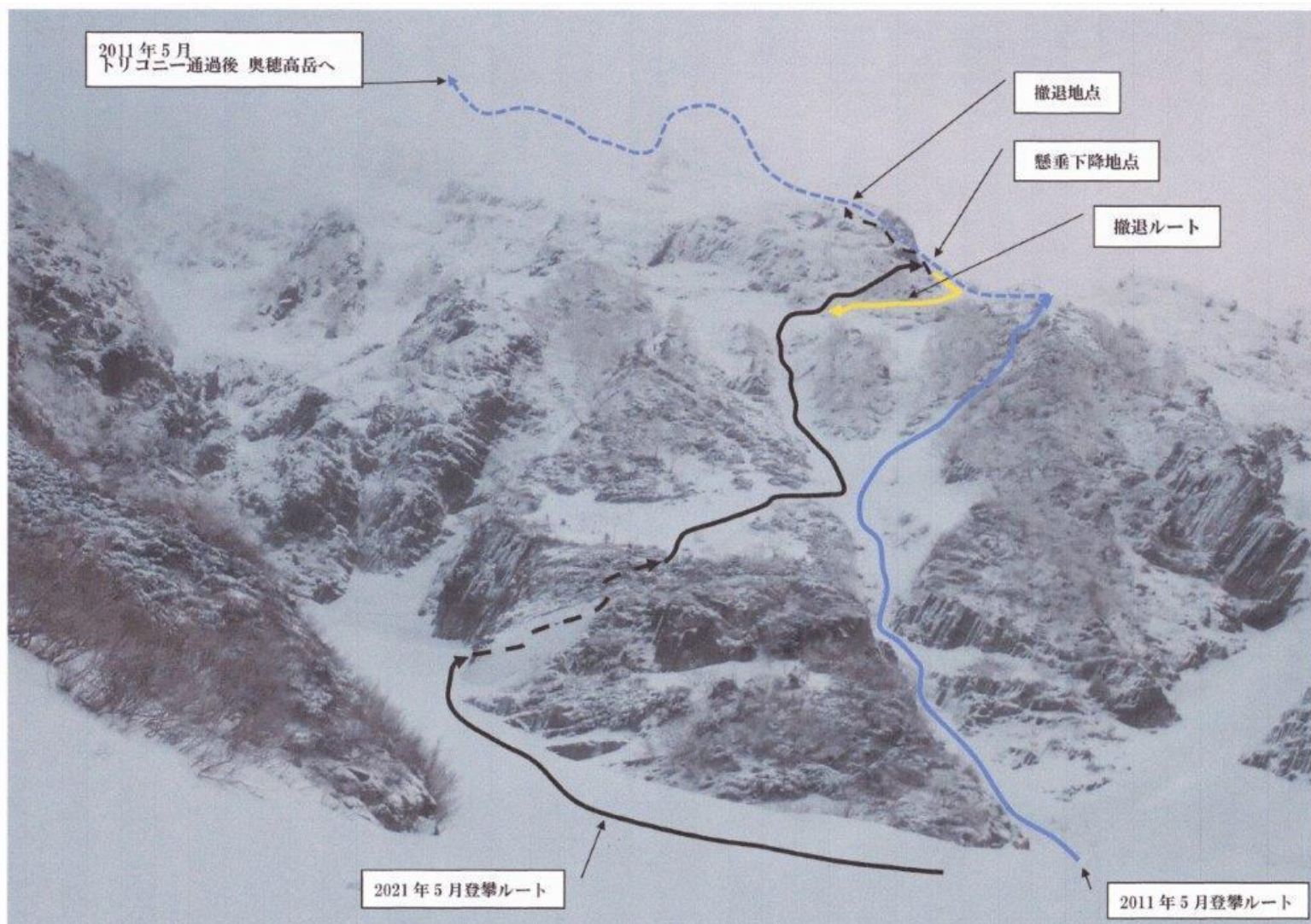
天気がもう少し良ければ、上高地でテントを張ってゆっくりしたかったが、吹雪となったため平湯へ下山。

2日は、高山市内に宿を見つけ、駅前の飲み屋で打ち上げ。3日夕刻には、帰北した。

前回 2011 年 5 月以来の 3 回目の南陵。同ルートとは思えないほど積雪が多く、途中撤退したものの春の奥穂高岳南陵の雪壁と格闘し、それなりに充実した山行であった。



【参考写真】2011 年 5 月 登攀ルート



今回、2021 年 5 月の登攀ルートと 2011 年 5 月の登攀ルート

奥穂高岳南陵下部の登攀ルート考察

連休前半に寒気に伴う降雪があり、今回の登攀中にも確認できたが、表層雪崩が起きるとされている顕著な「すべり面」（地表面の積雪上に出来た薄氷の滑りやすい面）が、ラッセル時に確認でき、そのすべり面の上に場所にもよるが 30cm 位新雪が載っていた。

傾斜があるのり面では、気温が上がれば確実に雪崩が起きる状況で、現に奥明神沢では、午前中に雪崩が発生し、撤退したパーティーがあるとの情報があつた。

今回の南陵の取付き地点は、積雪状況を考慮し左側から巻いて、草付きを突破し右にトラバース気味に南陵への登攀ラインに進むコースを選択した。

報告書にも書いているが、トリコニーの下あたりでまったく見通しもきかず気温も下がってきてこのまま進んでも、ラッセルを伴う登攀では、トリコニーを抜けて稜線から奥穂高岳山頂さらに下山のことを考えた場合、行程的が厳しいと容易に判断がつく状況であつた。

事前の情報で、天候が昼からさらに荒れる予報であつたことも忘れてはならない。

2011 年 5 月の場合は、積雪も少なく右からルンゼを真っすぐに登攀し、右の雪壁より南陵の登攀ラインに入りトリコニーに至るルートを取っていた。

積雪期の登攀では、リスクをゼロには出来ないが、積雪の状況で出来るだけリスクを軽減するため、まず気温が上昇する前に抜けてしまうことが望ましい。

海外での氷河を通過するルートの場合、気温上昇によるクレパスへの転落を避けるため深夜に出発、昼頃まで下山することがセオリーである場合が多い。

最短ルートである 2011 年 5 月の登攀ルートを選択することも選択肢の一つであるが、積雪に応じたルート選定が必要であり、感覚的に草付きからのルートを選択した。

結果論であるが、雪壁に望んでラッセルで進みだした頃には、トリコニーまで行けたらという思いで臨んでいた。

伯耆大山の積雪を伴った時の北壁を登っている感覚で、年齢を重ねた現在、春の穂高の登攀を満喫することができ、それなりに充実した山行であつた。